

書評

中村正人 編

末梢血管インターベンション
症例に学ぶベスト・テクニック

岸和田徳洲会病院副院長・循環器科

横井 良明

中村正人先生らによる末梢血管インターベンションのガイドブックが刊行された。同書のような末梢血管のインターベンションの症例集は極めて珍しい。また、この分野が従来は放射線科、血管外科医の領域であったことを考えると、循環器内科医の参入は単なる余技ではなく、PCIの技術を基礎とした、循環器科の新たな血管内治療の試みの書でもある。この書で扱われる末梢血管インターベンションの分野は、鎖骨下動脈、腎動脈、下肢動脈が主に症例とともに解説され、また合併症にも詳細に触れられている。

鎖骨下動脈のインターベンションでは、川崎友裕先生らが末梢血栓防止としての簡便な血栓吸引法が具体的に解説されており、明らかなevidenceのある方法とはいえなくても、吸引物質がシースポートから得られていることから、合併症の軽減に役立つことが推察される。

腎動脈のインターベンション、

特にステント植込み術は広く普及してきたが、その安全な施行のためには本書のような基本的テクニックもさることながら、合併症、再狭窄に関する記述に対する十分な知識を備えて治療に臨むことが必須の最低条件として必要である。腎動脈は簡単にみえても難しいことが多く、本書を熟読されたい。

下肢動脈のインターベンションは最も広く行われており、腸骨動脈から膝窩動脈以下まで様々なテクニック、ワイヤー操作、IVUS、CTO開存方法の記載がなされている。特にparallel wire法、膝窩動脈穿刺などはわが国において進歩している分野であり、そのテクニックは時に必要となる。これが本書の最も特徴といえる。また、IVUSと体表面エコーによるインターベンションは今後の末梢インターベンションの新しい方向であり、それがscienceを伴ってきたときには、日本人インターベンショニストから造影剤、放射線

を極めて低減できる、安全な血管内治療の提言がなされることも予想させられる。

ただ、本書は循環器内科医が主で、冠動脈用の装置で画像が撮像されており、画像が不鮮明なのが残念である。循環器領域でもDSA装置の早期普及が望まれる。また、膝窩動脈以下、脛骨動脈の穿刺の功罪はいまだ不明であり、単なるCTO再疎通の方法としてではなく、CLI治療全体での位置づけが必要になるのではないだろうか？

いずれにしても、日本の循環器内科医だけでこのような末梢血管インターベンションの実際的な本が生まれてきたのは大変喜ばしい。これはひとえに中村正人先生の企画、努力の賜物と推察するが、新世代の若い先生方が末梢血管インターベンションを新しい方向としてめざしていることも大変好ましい。本書を参考として、末梢インターベンションがPCIの余技としてではなく、他科から尊敬と信頼を得られる血管治療技術として発展していくことを望んでいる。

〔B5 頁288 2007年 定価
7,875円(本体7,500円+税5%) 医学書院刊〕

* * *